書評 *Field Guide to the Patchy Anthropocene: The New Nature*

Book Review *Field Guide to the Patchy Anthropocene: The New Nature*

笹本 美和

SASAMOTO, Miwa

Abstract

This paper reviews *Field Guide to the Patchy Anthropocene: The New Nature* (2024), published by Stanford University Press and authored by Tsing, A.L., Deger, J., Saxena, A. K., and Zhou, F.

In the first section, I outline the main arguments presented in the book. The second section features two digital projects—Feral Atlas, which captures Anthropocene phenomena through multiple forms of knowledge based on field research conducted in the patches of the Anthropocene, and an audiovisual essay based on the Yolŋu people's practice of tuning in to what the sea will tell them. By focusing on these projects, I examine how multiple forms of knowledge are interwoven to generate collaborative ways of knowing.

1 *Field Guide to the Patchy Anthropocene: The New Nature* の内容

本稿は、Tsing, A. L.、Deger, J.、Saxena, A. K.、Zhou, F. の共著により、2024 年に出版された *Field Guide to the Patchy Anthropocene: The New Nature* の書評である。本稿の第 1 節では、原著において取りあげられている主な議論を紹介する。第 2 節では、著者らが制作に携わるデジタルプロジェクト Feral Atlas やオーディオビジュアルエッセイに焦点を当て、複数の形態の知識を重ねあわせ、共同知を生み出す試みがどのように行われているのかについてみていく。

Tsing, A. L. は、『マツタケ：不確定な時代を生きる術』の著者であり、カリフォルニア大学サンタクルーズ校の人類学の教授である。Deger, J. は、環境や芸術に関心を抱くチャールズダーウィン大学の人類学者であり、デジタルヒューマニストでもある。Saxena, A. K. は、環境人類学を専門とするノーザン・アリゾナ大学の助教であり、Zhou, F. は、コロンビア大学の建築学の非常勤助教である。

原著において著者らが焦点を当てるのは、帝国主義や資本主義に基づくインフラ構築プ

プロジェクトである。この例として、商業販売用の作物や家畜を育てるために生態系を単純化したプランテーションや畜産場、収益性を上げるための灌漑システムやダムなどが挙げられる。入植者や資本家らによって推し進められるこうしたインフラ構築プロジェクトは、植民地化や産業化の歴史のなかで不平等な立場に置かれてきた人々の地域に甚大な影響を及ぼしてきた [Tsing et al 2024]。入植者や彼らに伴ってやってくる外来生物は、そこに暮らす人々の土地や生態系を壊滅させ、インフラ構築プロジェクトの主導者たちに都合のよい形態へと改変されてきたのである [Tsing et al 2024]。

著者らは、近代主義的な哲学や技術に基づくこれらのインフラの物質性や形態に着目し、人間のインフラと人間以外のものたちとの関わりのなかで、野生の増殖（感染症や病害の蔓延、多様な生物の絶滅、大気汚染など）が生み出されることを指摘している [Tsing et al 2024: 39]。例えば、入植者や資本家らは、収益を上げるために現地の人々の生活や生態系を顧みず、単一作物のプランテーションを作り出した。このように生態系が単純化された商業用農地の形態は、病原菌の増殖を加速させる [Tsing et al 2024: 42-44]。そうして生み出された病害は、プランテーションを超えて周囲に暮らす人々の様々な作物が植わる畑にも広がり、地域の生態系を破壊する [Tsing et al 2024: 43]。病害への対処として化学物質が用いられるが、それは地域住民や動物、植物の身体に害を及ぼすだけでなく、科学毒に耐性をもつ病原菌を生み出すことにつながる [Tsing et al 2024: 73]。病原菌が単純化された生態系に適應する速度は、人間が新たな殺菌剤を作り出すスピードを遥かに上回り、人間の手に負えなくなった病気はますます蔓延するのである [Tsing et al 2024: 186-189]。

人新世という危機的状況を生み出す帝国主義や資本主義に基づくインフラの物理的形態（景観）を、著者らは「人新世のパッチ」と呼ぶ。ある地域やある時代に起こっている人新世的な出来事をパッチ（異質性を示す景観生態学の空間概念） [Tsing et al 2024: 35] として特定し、パッチワークのようにつなぎ合わせていくことで、複数の時間的・空間的スケールを超えた関係性を捉えることが可能になる [Tsing et al 2024: 23-24]。これは、人新世という惑星規模の現象を考える助けにもなると著者らは述べている [Tsing et al 2024: 24]。また、グローバルな政治経済的状況やそこに暮らす人々の生活、生態系などの様々なスケールにおいて現れる人新世の現象を捉えるためには、複数の形態の知識を重ねあわせた視点が必要である [Tsing et al 2024: 24]。Tsing, A.L. は、景観を人間と人間以外の諸存在の活動の堆積（過去の痕跡を示すアーカイブ） [Tsing et al 2024: 152] として捉えることで、景観から複数の歴史を読み取る方法を示している [Tsing et al 2024: 152-159]。

例えば、本著のなかでは、植民地化の歴史のなかで世界中に広まった近代的な水工学技術とホテイアオイ（水生植物）の増殖との関係が紹介されている [Tsing et al 2024: 131-135, 152-159]。近代的な水工学技術によって建設された灌漑設備やダムは、水路や川を通る水の流れを停滞させ、澱んだ水辺を好むホテイアオイの格好の生息地となった [Tsing et al 2024: 132]。そして、水面を覆いつくすように広がったホテイアオイは、人々の水上交通を妨害するだけでなく、大量の水を吸い上げることで他の植物を追い出し、酸素レベルを低下させることで淡水生物を死滅させ、人々の漁業に壊滅的な影響をもたらした [Tsing et al 2024:132-133]。また、ホテイアオイが種子の発芽や苗の定着を妨げることで水稻栽培が難しくなり、貧困に陥った人々は飢饉によって亡くなった [Tsing et al 2024: 133]。近代的な水工学技術が世界中に生み出した均質な水環境は、ホテイアオイが有性生殖によって様々な形態を生み出す必要をなくし、クローン繁殖を可能にさせた [Tsing et al 2024: 134]。こうして、近代的な水工学技術によって生み出された世界各地の水辺において、ホテイアオイは人々による駆除活動では到底追いつかないスピードで増殖している [Tsing et al 2024: 133-134]。

このように、帝国主義や資本主義のインフラプロジェクトが世界中に生み出す景観の物理的形態（人新世のパッチ）に着目することで、ホテイアオイが人間のインフラと関わりながらどのように増殖してきたのかという歴史や、人々がそれをどのように経験してきたのかという歴史が絡み合う様相が見えてくる。著者らは、こうした人新世の現象を捉えるためには、複数の存在の視点から見た歴史を重ねあわせる必要があり、そのためには現地調査に真剣に取り組むことが重要であると主張する [Tsing et al 2024:24]。以下では、緻密な現地調査から得られる複数の知識を重ねあわせ共同知を生み出す試みとして、著者らが取り組んでいるデジタルプロジェクトに着目したい。

2 複数の知識を重ねあわせる Feral Atlas と Lun' thun の試み

著者らは、人新世のパッチをフィールドとする 79 件の現地調査報告書をもとに Feral Atlas (<https://feralatlus.org>) というデジタルプロジェクトを立ちあげている。本プロジェクトには、科学者、人文科学者、アーティスト、詩人、人新世を観察する現地の人々が参加している [Tsing et al 2024: 48]。参加者たちは、本プロジェクトにおいて、単一の尺度にとらわれることなく、複数の知識形態から人新世を捉えるための方法を模索してきた [Tsing et al 2024: 249]。

以下では、著者らがその実現にあたり試みているマッピングや「積み重ね (Piling)」の手法について取りあげるとともに、先住民や人間以外のものたちの存在論の視点から人新世の現象を捉えようとする *Lup' thun* というオーディオビジュアルエッセイに目を向けてみたい。

2.1 マッピング

著者らは、私たちの世界認識が地図に影響されながら形づくられることを指摘し [Tsing et al 2024: 47]、「どのような地図が人新世の現象を最もよく捉え、伝えることができるのかについて考えなければならない」 [Tsing et al 2024: 34] と述べている (例: アフリカや南米が縮小され、ヨーロッパや北米が拡大されたメルカトル図法は、欧米中心的な視点に基づいた地図の形態である [Tsing et al 2024: 49])。

Feral Atlas の試みにおいて作成される地図は、インフラ構築プロジェクトによって在来の生き物の世界が破壊され、再形成される生態学的パッチを描くものである [Tsing et al 2024: 44, 48]。これは、人新世を生み出す帝国主義や資本主義のインフラ構築プロジェクトを批判する根拠にもなる [Tsing et al 2024: 48]。マッピングの例として、アジアやラテンアメリカにおける開発プロジェクトのなかで導入されたアメリカウシガエルが、在来のカエルを食べ、個体群全体を死に至らしめる病気を蔓延させた事例が取りあげられている [Tsing et al 2024: 50]。ある地点から飛び出していくアメリカウシガエルを絵で描き、別の地点においてアメリカウシガエルによって食べられる在来種の写真を組み合わせることで、パッチをつなぎ、アメリカウシガエルの広がりや環境に与える影響をプロセスとして描き出すのだ [Tsing et al 2024: 50-52]。

このようなマッピングの方法は、別々の地点において発生している人新世のパッチをつなぐことによって、現象を捉える空間的・時間的スケールの移動を可能にし、ある特定の地点に着目するだけでは見えない野生の増殖の過程を捉えることができる [Tsing et al 2024: 55]。また、この地図は現地レポートやアートや写真という様々な媒体を組み合わせることによって、単一の視点や尺度から捉えることに抵抗している。現地調査報告書はそこに暮らす人々の視点を含み、アートは自然科学にも人文科学にも寄らない独自の視点をもっている [Tsing et al 2024: 204]。このように作られた *Feral Atlas* プロジェクトの地図には、複数の視点が含まれている。

2.2 積み重ね (Piling)

次に、原著のなかで「積み重ね (Piling)」の方法として提示されている、並置 (Juxtaposition)、置換 (Displacement)、集積 (Amassment) についてみていきたい。

2.2.1 並置 (Juxtaposition)

並置 (Juxtaposition) とは、「対象やアイデアをくっつけたり離したりして配置すること」 [Tsing et al 2024: 198] である。並置は意味を生み出すためのテクニックであり、一見すると関連がないように思われていた事物間の関係性を見る人に考えさせることができる [Tsing et al 2024: 198-199]。Feral Atlas の現地調査報告書は、生態系に関する現地の人々の語りや外来植物をテーマにした民謡、火山泥流に関する地元の人々の説明などを含む様々な形態の知識を並置する。それによって、人間を対象に研究する方法と人間以外のものを対象に研究する方法との間にある溝を埋めようと試みている [Tsing et al 2024: 202]。

また、異なる伝統に基づく知識を並置することは、自然科学と人文科学の双方の知識を必要とする人新世的現象の分析にも有効である [Tsing et al 2024: 203]。例えば、著者らは新型コロナウイルスのパンデミックを事例として取りあげている。隔離によってフラストレーションが蓄積し、レバノン内戦の記憶が呼び起こされるといった人々の経験に基づく視点、微生物が宿主を乗り換えることによって大惨事が引き起こされるという生態学的視点、ジャストインタイムのサプライチェーンが中国からヨーロッパへとウイルスを急速に拡散したというグローバルな政治経済的状况からみる視点など、異なるスケールの視点を並置することで重層的にパンデミックの様相を捉えられることを指摘している [Tsing et al 2024: 202-203]。

2.2.2 置換 (Displacement)

近代主義的な思想を背景とする、行き過ぎた一般化を乗り越える方法として、著者らは置換 (Displacement) を提案している。事例としては、“世界中でカエルが姿を消している” という一般論の地位が、“ニューイングランド郊外においてはグリーンガエルがうまく生息している” という事例によって揺るがされることが挙げられている [Tsing et al 2024: 206-207]。地域に根ざした研究は、グリーンガエルの避難場所を見つけ、何が彼らの繁栄を支えているのかを明らかにすることで、過度な一般化に待ったをかけるのである [Tsing et al 2024: 207]。

また、ウガンダの都市管理者が迷惑な存在として語るマラブーコウノトリは、ごみ収集に携わる人々からは愛されていることを取りあげることで、都市管理者の見解が唯一正しいわけではないことを示すこともできる [Tsing et al 2024: 207]。置換の技法は、学問に限らず詩にも意味をもたらす。例えば、Spahr, J. の詩は、小川に生息する生物の名前を列挙した後、それらの名前を小川を流れる廃棄物の名前に置き換えることで、これまでそこに暮らしてきた生物が失われたことを示すのである [Tsing et al 2024: 207-209]

2.2.3 集積 (Amassment)

異なる事例を比較するためには2つの事例を標準化し、類似点と相違点を見出す必要がある [Tsing et al 2024: 210]。一方で、集積 (Amassment) は事例を標準化することなく、類似点や相違点を自由に考えることを可能にする [Tsing et al 2024: 210]。本著では、国際取引市場がチェルノブイリ原発事故後の放射線を吸収した野生ブルーベリーを世界中に広める事例と、19世紀にヨーロッパからアメリカへ向かう商船のバラスト材に紛れ込んでいたヨーロッパの葦が北米の湿地帯の在来種を駆逐した事例が取りあげられる [Tsing et al 2024: 209-210]。著者らは、これらの事例を、“野生の性質” (人間以外の生物が人間のインフラストラクチャーを自らの活動のために利用できるよう調律するモード) [Tsing et al 2024: 209] という同一のカテゴリーに分類することで、両者の広がりや国際海運というインフラを通じた動きとして捉えている [Tsing et al 2024: 210]。こうした集積は、異なる事例同士の新たなつながりを生み出す思考を刺激する。

以上で見てきたように、Feral Atlas プロジェクトの現地調査報告書は、地域住民の経験的知識や生態学的知見、グローバルな政治経済的状况といった異なるスケールの知識を、民謡、詩、アートなどを含む様々な形態で記述したものである。そうした異なるスケールや形態をもつ知識を並置することによって、著者らは、人間を研究する方法と人間以外の生き物を研究する方法との間にある隔たりを埋め、自然科学・人文科学・芸術のそれぞれの視点を重ねあわせて人新世を捉えることを試みている。異なる事例の間を自由に行き来することを可能にする積み重ね (Piling) の手法は、Feral Atlas の報告書を読む人々の思考を刺激し、多様な見方へと彼らを導くだろう。

2.3 海の声に耳を澄ませるオーディオビジュアルエッセイの試み : Lug' thun

文字や音、写真、映像、アートなど様々な媒体を組み合わせることができるデジタル環境

は、複数の視点を重ねあわせる試みを支えるものの1つだろう。オーストラリア北部の先住民ヨルングの研究者である Gurrumuruwuy, P. と 15 年にわたり協働してきた Deger, J. は、大学等からの資金提供を受け、Gurrumuruwuy, P. や Miyarrka Media とともに Lup' thun というオーディオビジュアルエッセイ (<https://www.curatorium.au/taja-journal/form-content/lungthun-sand-saltwater-and-collaborative-attunements>) を制作してきた [Gurrumuruwuy et al 2024: 28-29]。このオーディオビジュアルエッセイは、海岸において砂や海水の模様となって現れる海の精霊の声に、ヨルングの人々が注意深く耳を澄ませる実践から立ちあがっている。海面上昇の影響を受けるオーストラリア北部の海岸線を訪れるとき、ヨルングではない人々は、海岸の枯れていく木々や漂着ごみに目を向けるかもしれない [Gurrumuruwuy et al 2024: 30]。しかし、ヨルングの人々は、大地や海が語りかける声を聴くために、小さな波の形や砂の模様を観察するのである [Gurrumuruwuy et al 2024: 30]。

このオーディオビジュアルエッセイは、ヨルングの人々が暮らす土地で起きている現象を、海外の理論家らがもつ枠組みで捉えるのではなく、ヨルングの人々がしているのと同じように、海水や砂が形づくるイメージを見つめ、海の語りに耳を傾けることから始めている [Gurrumuruwuy et al 2024: 30]。海水や砂の模様を撮影しつづけるという方法によって、海が語りかけてくるイメージを拾い集め、カメラやマイクを通してそれらのイメージや音、ヨルングの人々の語りを保存し、物語をコンピュータ上で形にする [Gurrumuruwuy et al 2024: 29-31]。「海水や砂の語りかけてくる表現の様式をデジタルという形で増幅させるためには、外部から持ち込んだ枠組みを用いるのではなく、それらの言葉に寄り添う表現の形態が必要であり、作業には慎重さが必要とされた」 [Gurrumuruwuy et al 2024: 33-34] と Deger, J. は述べている。

このように制作され、インターネット上で公開されたオーディオビジュアルエッセイは、Web ページを訪れるヨルング以外の人々をも、海の語りに耳を澄ませる実践へと誘い込む。ヨルングの人々が実践する海との向き合い方を世界の人々に発信し、彼らとは異なる存在論をもつ人々に語りかけていくために、オーディオビジュアルエッセイの文章は主に英語で書かれている。しかし、そこに暮らす人々が世界と関わる方法は、その人々の存在論と密接に関係するものであり、現地語でなければ表現することができない部分もあるのではないだろうか。植民地化の歴史を通して世界各地に広まった共通言語としての英語は、複数の形態の知識を重ねあわせ、共同知を生み出す試みにどのような影響を与えるだろうか。ある

地域の人々の知識形態を他の知識形態に翻訳するのではない形で、どのように複数の声や視点を含めて世界を描いていくことができるのか [Tsing et al 2024: 246]。これらの問いについて、私自身も著者らとともに考えていきたい。

参考文献

- Gururumuwuy, P., Deger, J., Gurugulmiwuy, E., Balpatji, W., Balanydjarrk, M., & Coffey, V. B. 2024. Luŋ' thun: Sand, saltwater, and collaborative attunements. *The Australian Journal of Anthropology Vol. 35*: 27-38 (オーディオビジュアルエッセイ URL: <https://www.curatorium.au/taja-journal/form-content/lungthun-sand-saltwater-and-collaborative-attunements>) .
- Tsing, A. L., Deger, J., Saxena, A. K., & Zhou, F., eds. and curators. 2021. *Feral Atlas: The More-Than-Human Anthropocene*. Stanford University Press. (<https://feralatlantlas.org/>).
- Tsing, A. L., Deger, J., Saxena, A. K., & Zhou, F. 2024. *Field Guide to the Patchy Anthropocene: The New Nature*. Stanford University Press .

(千葉大学大学院博士前期課程 文化人類学)